

日本体育学会
体育哲学専門分科会

会報

Vol.14 (3), November, 2010

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 学会参加レポート
- ♪ 運営委員会からのお知らせ
- ♪ 体育哲学専門分科会のお知らせ
- ♪ 次号予告

巻頭言

哲学を实践すること

樋口 聡 (広島大学)

アメリカ、フロリダ・アトランティック大学の哲学者リチャード・シュスターマン (Richard Shusterman) は、著書 *Practicing Philosophy: Pragmatism and the Philosophical Life* (Routledge, 1997) で、哲学(philosophy)はもちろん学問であるが、「実践」という視点から見れば、詩やイデオロギーの形を取ることがありえるし、セラピーとして機能することさえある、と述べる。そして、世界についての自己の経験や思いを意識的に明瞭化することとしての自伝でもある、とも言う。

autobiography としての哲学。それは、世界についての自己の経験や思いを意識的に明瞭化する。自己の経験の意識的な明瞭化。それは、systematic articulation である。ここには、私たちが哲学を反省的に見つめ直すためのエッセンスが提示されているだろう。おそらく体育哲学やスポーツ哲学といった試みの立脚点は、ここにこそあるのではないか。

私たちはさまざまな経験を持ちうる。それらの経験のいくつかに引き留められ、関わりを持ち、着目し、私たちはその経験の意識的な明瞭化を図ろうとする。何がいかに明瞭化されるかは、もちろん問題である。しかしながら、哲学の実践を試みる第一歩は、自己の経験の問題化である。

私は、今、自分自身が病と向き合った経験に引き留められ、それを意識的に明瞭化したという衝動に駆られている。それは病の経験を哲学する実践となる。いかなる方法と方向性が、そこにはありえるか。私が今持ちうるだろうと思われる明瞭化の手段は、「臨床医学の教育学的考察」という哲学である。

私が向き合わざるを得なかったチャグ・ストラウス症候群は、免疫不全の病である。免疫学者の多田富雄に言わせれば、「自己」を破壊し、拒絶し、排除する「免疫の病い」、病いから免れるための機序で起こる病い、「自己免疫病」である。多田の問いは、人間はどこまで「自己」なのか、「自己」と「非自己」の境界は明確なのか、といった存在論的地平に至る。多田は、言う。免疫学的「自己」というものが存在しているわけではない。反応する「自己」、認識する「自己」、認識される「自己」、寛容になった「自己」というように、「自己」は免疫系の行動様式によって規定される。「自己」というのは、「自己」の行為そのものであって、「自己」という固定したものではない(多田富雄『免疫の意味論』青土社、

1993年).

この経験を機縁に、私は「臨床」について改めて考えてみようと思っている。医学的臨床が考察の出発点であるが、中村雄二郎が言うように、＜臨床の知＞はそれを超えて考えられる＜フィールドワークの知＞である。＜演劇的知＞あるいは＜パトスの知＞でもある（中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波新書、1992年）。さらに、近代科学のパラダイムに留まる臨床心理学を超えて心理臨床学を構築しようとする皆藤章ら（皇紀夫（編著）『臨床教育学の生成』玉川大学出版部、2003年）を参照しつつ、臨床教育学ならぬ教育臨床学への試みがありうるのではないかとも思っている。臨床の知として拓かれる人間理解、それは、体育哲学、スポーツ哲学にとっても、これからの目指すべき方向性の一つを示唆するものであるだろう。

（樋口 聡 higuchis@hiroshima-u.ac.jp）

体育哲学考

体育哲学考：「脳」までトレーニング？

新保 淳（静岡大学）

昨今、「脳トレ」がブームとなり、巷をにぎわしている。それは書籍によるものだけでなく、ゲーム機を利用したものまで多種多様な展開を見せている。ところでこうした「脳トレ」ブームは、スポーツ界の方が先陣をはっている（と思う）。というのも「脳まで筋肉(?)」と言われるほど、スポーツ界では、一般社会に先駆けて「脳」をトレーニングしていると思われてきたからである。

しかしながら、今日の「脳トレ」とスポーツ界の「脳トレ」には、微妙な差異がある（と思う）。前者が「治療 (Treatment)」,いわゆる「ボケ防止」に利用されているのに対して、後者は「能力増強 (Enhancement)」を目指しているからである（具体的には、スポーツ界におけるエートスの強化?）。人間の「右肩あがり志向」からする限り、当然のごとくいずれ今日の一般的「脳トレ」も“Treatment→Enhancement”の方向へと突き進むことは確実であろう（と思う）。こうした今日の動向に悪乗りして、本小論では、「脳トレ」の一部をなすであろう「脳のストレッチング」のあり方とその効果について、少々、考察を試みてみることにする。

本考察は、録画ビデオの視聴から始まる。ある日、撮りためてあったビデオから何気なく「再生ボタン」を押して映し出されたのが、NHK スペシャル（2010/3/21日放送）の「命をめぐる対話—“暗闇の世界”で生きられますか」であった。そこには、まったく意思伝達ができなくなる TLS (Totally Locked-in State=完全な閉じ込め状態) の患者さんたちが映し出されていた。こうした映像は、これまでも ALS (筋萎縮性側索硬化症) の患者さんを紹介するビデオ等で見たことがあるものであり、ビデオを見ている最中には、新たな感動を生み出すものではなかった。それから数日して、静岡新聞に柳田邦男の『『生きる意味』を語る身体』という記事を見つける。それは数日前にみたビデオの内容について再び語る記事であった。その記事の中で紹介されていたのが、今年、大宅壮一ノンフィクション賞を受けたという「逝かない身体 ALS 的日常を生きる」(川口有美子, 医学書院, 2009)であった。これについて柳田は、母親が TLS の状態に陥ってから 12 年間も看病し続けた川口さんの「気づき」について、次のように触れている。「たとえ沈黙したままの身体であっても、毎日豊かな語りかけをしてきて、介護者の思考を促すのだということ。そういう中で、母の身体が『あなたたちと一緒にいたいから生きている』と伝えるために無限の時

間を求めていることに気づいたのだ。新たな身体観だ」。

我々体育・スポーツ関係者は、これまでまさに「動いて動いて、動き回る」ことで語りかけてくる「身体」のみを対象としてきた。この意味において、完全に動かない「身体」とスポーツ界が対象としてきた「身体」とは、両極端にあると言えるであろう。だからこそ、完全に動かない「身体」においても、コミュニケーションを取ることが可能だとする川口さんの「身体」に対する「気づき」は、まさに想像を絶するものであり、すぐに購入し読んでみることにした。

読後の「効果」は、筆者にとって、まさに「脳のストレッチング」そのものであった。まばたきができたり、ほおの筋肉が動く ALS の患者さんが、自分でキーボードらしきものに打ち込み、パソコン画面上で意思疎通をはかっている映像は、たびたび目にしたことがある。が、それ以上に病状の進行した「身体」となると、もはや我々の想像域を逸脱する。川口さんと母親の会話は、眼球を右にやるか左にやるか。あるいは文字盤を見つめるその視線の先を看護者がたどることで成り立っていたという。もちろん、短期間でなく、12 年間という看護の歳月が、このことを可能にしたのではあるが。

筆者も大学の体育指導において、つい「(不完全に) 閉じた状態」として突き放したくなる「身体」を持った学生さんに遭遇することがある。しかしながら、先にあげたような著書によって「脳のストレッチング」がなされていれば、「身体」にかかわるプロである以上、それを認めることがあってはならないであろう。そのような「身体」とどのように向き合い、どのようにコミュニケーションをとっていくのか。これこそが常なる思考(志向)姿勢であり、そのためにも常に柔軟性をもった「脳」であり続けるための「ストレッチング」は欠かせないであろう(もちろんこのことは、あらゆる事柄に通じるであろう)。

「脳トレ」が、「筋力増強」だけでなく、その柔軟性、調整力、巧緻性 etc といったバランスを持って臨む時に有効な効果を生み出すとするならば、体育哲学もまた、必要不可欠な学問として新たな視点から取り組むことができるのではないか(と思う)。

(お金に関する「脳のストレッチング」を希望される方は、「絶対貧困 世界最貧民の視線」(石井光太, 光文社, 2009)をお薦めします)

(新保 淳 ehashin@ipc.shizuoka.ac.jp)

書籍紹介

夏井睦. 「傷はぜったい消毒するな—生態系としての皮膚の科学—」. 光文社新書. 2009.

佐々木 究(山形大学)

「傷はぜったい消毒するな」という、表題がそのまま主題になっている本をご紹介します。マスメディアで取り上げられているのをちらっと見たことがありますので、ご存じの方やすでに読まれた方もいらっしやるかもしれません。湿潤療法(あるいは閉鎖療法)をめぐるお話です。

私がこの本と出会ったのは、今年(2010年)の7月でした。出張のため東北地方の某市を訪れたとき、アポイントまでの時間調整のために入った古本屋さんで、滞在時間10分ほどの間に見つけたのでした。その頃私は、別の本をいくつか読んでいましたが、立て続けに紹介されているのを見たりして、「なるほどそういう本もあるんだ」と興味を引かれていたところでした。だから本屋では、短い時間にもかかわらず、目がとまったんだと思います。こういう本は、私的には「当たり」です。即購入しました。

本書で展開されている話は、かなり衝撃的です。私は、幼い頃、擦り傷や切り傷ができたときは、消毒薬で傷口をしっかり消毒し、できれば絆創膏は貼らず、そのまま乾かしておきなさい、と教えられました。さらに、カサブタができれば治ってる証拠だから剥がすな、とも言われました。傷口が「ジュクジュク」したら、それは膿んでいるのだから洗って消毒し直すように言われたこともあります。こうしたやり方を私は、不精の故に必ずしも実践しませんでした。しがく当たり前のこととは思ってきました。しかし、著者によれば、これらは「科学的根拠のない単なる風習」ということになります。傷口の消毒や乾燥は、治癒にとってむしろマイナス要因であり、「ジュクジュク」は「最強の治療薬」なのだそうです。驚きました。

本書は、一つの疑問をきっかけとする著者の長年に渡る思索と実践の果実と言えるでしょう。現役の外科医師である著者に「風習」への最初の疑問が兆したのは彼がまだ研修医だった頃とのことです。すでに四半世紀もの時が流れたことになります。

当時、著者は研修先の病院で、術前の手洗い、術中の無菌操作、術後の定期的な消毒と抗生物質の投与という一連の「外科の常識」を教え込まれていたそうです。しかし、研修二年目にはじめて「痔」の手術をしたとき、こうした「常識」への疑問が浮かんだと述べています。術部を縫合した際、他の部位の手術のように消毒しようとする時、先輩医師に「そこは消毒しなくていいよ。どうせ便で汚れるからね」と教えられたというのです。たしかにこの部位は、ことあるごとに汚れます。だから「消毒しても無駄」というのは理屈です。しかし、一方は頻りに消毒しなければ化膿し、他方は、もともと汚れる部位であるにもかかわらず消毒しなくても大丈夫というのは、指摘されているように、おかしいことと思えます（コロンブスの卵かもしれません）。ここから、「医学界に一方的に喧嘩を売る」著者の挑戦が始まるわけです。

本書では、これまで常識として疑いもしなかったことが、理論的かつ事例に触れながら覆られていき、読んでいてとても痛快です。とりわけ興味深いのは、常識と闘うために著者が根拠を求めたのが、当の医学関係の知見ではなく、生物学や化学の知見だったという告白です。当該分野で問いを立て、これを解くために他の分野の知見をも参照する。そうして、改めて目の前の「常識」に立ち返り、これに批判を加える。扱う主題こそ違え、スタイルは、われわれが求めるところと重なる部分があるように見えますが、いかがでしょうか。

ちなみに、市販の絆創膏「キズパワーパッド」は、著者の言う「湿潤療法」と同じ理屈に基づいているそうです。幸か不幸か私は、これまでのところお世話になる機会がなく、「理屈」を追試することができていません。どなたか検証された方があれば、是非結果をお教え下さい。ただ、著者も強調するように「素人療法」は危険ですので、くれぐれもご無理はなさいませぬよう。

(佐々木 究 sasaki@e.yamagata-u.ac.jp)

学会参加レポート

日本体育学会第 61 回大会 鈴木明子(東海大学大学院)

日本体育学会の大会への参加は今回が初めてであり、すべてが新鮮で充実した時間を過ごすことができた。いくつかの専門分科会の発表を聴講した中で、哲学専門分科会の醍醐味だと感じたことが2つあった。発表の手段と、質疑応答に関してのことである。

当初は、テキストを読み進めるという哲学独特の発表形式に違和感を覚えた。スライドやレジメを使用した方が、聴講者としては内容の把握が易い上に面白みがあるのではないか、というのが率直な思いだった。しかし今では、その独特の発表形式にこそ哲学の醍醐味を感じている。本分科会に所属して数ヶ月しか経たない私にとってテキストの内容を把握することは困難であり、少しでも気を抜くと置き去りにされてしまう。そうすると、その発表は自分の身にはならなくなってしまう。

一方で、困難ではあるけれども、頑張ればなんとか内容が把握できるときもある。「詳細までは理解できていながこういうことだろう」という予測まじりの理解である。しかしその困難さの具合が私には大変面白かった。その上、発表した先生方のテキストを頂けることは貴重であり、今後修士論文を作成する上で最高の材料を与えていただいたと思っている。

ラスト10分の質疑応答はエキサイティングな時間であった。質問される先生がマイクに向かって歩いていかれる数秒間から既にわくわくし、質疑と応答のやり取りを見聞きし感じることで自分の中に新たなものが浸透していくような感覚を覚えた。本来ならば私自身が質問をするレベルにまで至るべきであり、傍観者であってはならない。しかし、目の前で繰り広げられるやり取りの中で、特に質疑内容から「目の付け所」を学び取り、そこから自身の「余地」を感じ取ることもまた重要なステップだと思っている。

学会終了後、他の分科会に所属する友人に「哲学の発表は頭が疲れる」と言われたとき、褒め言葉だと感じた。私自身、よい発表に出会った後は心地よい疲れを感じたし、3日間の学会を終えた今も疲労感と充実感を同時に感じている。一方で、学会が終わったところから自分の研究は再スタートする。この3日間で吸収したものを飛躍させ、最大限に生かすのは今後の自分である。

初めての学会参加は実りあるものだった。一年後の学会をひとつの指標にし、研究を更に面白くさせていきたい。

(鈴木明子 a.autumn1987@gmail.com)

運営委員会からのお知らせ

新保 淳(静岡大学)

「分科会メーリングリストへのご登録のお願い」

メーリングリストへ登録済みの方へはメーリングリストによって会報が配信されております。速報性、経済性、分科会活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げる次第です。次のような手順で登録できます。

1) グループへ参加するには、事務局：新保 (ehashin@ipc.shizuoka.ac.jp) までご一報ください。事務局にて登録の手続きをさせていただきます。

2) 登録完了後、taiikutetsugaku@yahoogroups.jp を用いてグループメンバーにメッセージを配信することができます。

体育哲学専門分科会のお知らせ

舛本直文(首都大学東京)

平成 22 年度第 2 回定例研究会を 2010 年 12 月 4 日 (土) に下記の要領で開催いたします。なお、研究会前に同じ会場で 14 時より運営委員会、研究会終了後 17 時 30 分より忘年会 を予定しております。会員の皆様ぜひともご参集ください。

・日 時 2010 年 12 月 4 日 (土) 15:00~17:00 (運営委員会は 14:00 から)

・会 場 立正大学大崎キャンパス 9 号館 (1 階 9B12 教室)

大崎駅・五反田駅から徒歩 5 分、大崎広小路駅から徒歩 1 分

(大崎駅/JR 山手線・湘南新宿ライン・埼京線・りんかい線)

(五反田駅/JR 山手線・都営地下鉄浅草線)

(大崎広小路駅/東急池上線)

山手通り沿い、大崎警察署の隣です。9 号館の場所は正面玄関の「インフォメーション」でお尋ねください。(お問い合わせは 090-4207-7376 釜崎まで)

【発表①】 小森伸一(東京学芸大学) 野外教育の考え方—今後の可能性をふまえて—

野外教育 (Outdoor Education) とは何か。それを専門にしない人たちにとっては耳慣れない教育分野であろう。一方、「キャンプ」、「環境教育」、「冒険」、「体験学習/教育」、「自然体験活動」などは、より聞き覚えのある言葉だと思われる。これらは野外教育を考える上でとても深い関わりをもつ周辺領域である。そこで本発表では、これらのキーワードとのつながりを示しながら野外教育の基本理論について紹介していく。

【発表②】 未 定

次号予告!

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は釜崎太(立正大学:kamasaki@ris.ac.jp)までお問い合わせ下さい。

体育哲学専門分科会報第 14 巻第 3 号

発行者 日本体育学会体育哲学専門分科会

大橋道雄(会長)

編集者 阿部悟郎(広報委員長)

発行日 平成 22 年 11 月 4 日

連絡先 989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南 2-2-18

仙台大学体育学部

0224-55-1147(直通)

アドレス: gr-abe@scn.ac.jp

【編集後記】

あの猛暑が去り、あつというまに季節は冬。体育哲学専門分科会の年度行事もあの学会大会を終えて後半戦へ突入。春に芽吹いた若手研究者がそれぞれの実りを学問的形式で世に問おうと日々努力しています。また、若手に負けじと不動の心で学問的認識を世に問い続ける常緑樹のような賢人も、あいかわらずのご健在。後半戦も、定例研究会で、専門誌上でのあれやこれや、とても楽しみです。えうご期待。

さて、気がつけばひとひたと忍び寄る新年。平成 23 年は「辛卯」だとか。みなさま、少し気が早いですが、どうか良いお年をお迎え下さい。(A 拜)